すばらしいの一言
松本さん（三川）の訪中印象記

中国和平委員会の招きによつて日本平和委員会から十名の代表が訪中した。九州代表として三川支部の松本永治さんが一行に加わり、九月二十四日出発、さる十月二十八日に無事帰国した。「三十二日間、全く毎日がビックリの連続だつた」と語つているが、本紙につぎのような訪中記を寄せられた。詳細は報告会などで、一人でも多くの組合員に、中国の真の姿を知らせたいといつている。

九月末から十月末まで三十二日間、中国和平委員会の招待により日本平和委員会の代表の一人として国慶節に参列すると共に、中国各地を見学して帰国しました。

この三十二日間はひと口にいつて、見るもの、聞くものが驚きの連続であつたということです。社会主義社会というものを頭の中でえがき、先輩の訪問記を読んではいたものの、各地でその現実を見、正しい指導と建設のすばらしさは勉強させられました。

三池の闘いについては、中国人民は非常に強い関心をもつています。撫順炭鉱では三池闘争支援のため、七十万の労働者が集つて支持の表明をしております。出発に際し大谷地域分会、かえで町地域分会の協力により、ホッパー・パイプ六本、竹水筒三本、組合からはち巻、写真集等を持参し、撫順をはじめ各地に贈りましたが、非常に感激され各地の展覧館や工人（労働者）文化宮に展示しています。上海の街頭には三池闘争の写真がはられていました。

周恩来総理の感激

周恩来総理と会つて握手したとき総理は手をはなさず「三井三池の闘いはすばらしい」感激している」といい、最後に別れるときも、わざわざ「三井三池の人」とさがして再び握手を求めて来ました。このことは中国六億五千万の人民の三池労働者にたいする支援と共闘をはつきり示したものです。

国慶節はまさに人民の祭典

北京における国慶節の式典は実に雄大であり、特に中国共産党と毛沢東主席にたいする信頼と、人民の誇りがみちみちています。毛主席や周恩来総理の手をあげるのにこたえて手に手に持つた花束をうち振り、そしてどよめきが行進の中からもり上つてきます。毛沢東万歳！　総路線万歳！　大躍進万歳！　人民公社万歳！　と口々に叫びながら通つて行きます。炭鉱労働者の民兵も坑内服装に銃をもつて行進しました。五十万の大集会が社会主義から共産主義への未来を目指して風船をとばし、アドバルンをとばし、白鳩をとばします。まさに人民の祭典なのです

社会主義制度のすばらしさに感動

社会主義建設のすばらしさはどこでも見られますが、二、三紹介したいと思います。

まず、黄河にダムが完成しております。これは揚子江の鉄橋に匹敵するものといえましょう。「山を歩ませる、河に道をゆずらせる困難に頭をさげない」の合言葉で数千年来水魔の恐らままにされていた黄河の水に道をゆずらせたのです。

黄河は水半分、黄砂半分の水が流れており、歴史によると千五百回以上はんらんし、下流八千万人が痛めつけられていたのです。「聖人が出れば、黄河の水は清くすむ」といわれていましたが、今はじめてその水がすんだのです。ダムの上に立ちますと、青い湖がはるかにつづく。西安の街まで約二百四十キロメートルの長さ、面積は二千三百平方キロメートルの大きさです。ちょつと想像されない広さです。黄河にはさらに四十六のダムをつくる計画があり、その第一号がこの山峡ダムなのです。やがて黄河は河でなくなるでしょう。

六カ年の計画で工事がはじめられたが（一九五七年―一九六二年）基礎的な工事が終つて発電機の取付工事中でした。二年繰上つて出来上り、またその費用は三分の一を節約したのです。日本のダム建設で、セメントや砂利が腹の中に入ることを考えると、社会主義制度のすばらしさを痛感します。国家が人民のものとなり、生産手段が人民の所有となり、働らけばはたらくほど人民の幸福がもたらされます。そこに建設の意欲が生れてくるのです。資本主義社会では増産すればするほどクビ切りと賃下げがくることは私たちが今までの闘いの中でよく知つています。すでに資本主義社会は行き詰つています。そしてその打開を戦争への道に求めようとしているのが、いまの安保体制です。

らく陽という街は一九四九年中国共産党が解放するまでは九万の人口で、市は四平方キロメートルの広さしかなく、中学校以上の学校は五つ四千人の学生しかいませんでしたし、工場は一カ所で労働者は百六十名でした。

この街は古い都で、九つの王朝がつづき七十人の王様が即位したという歴史をもつています。十一年後のいま、人口五十九万人、市街は七十九平方キロの広さに拡大し、学校は大学、専門学校だけで五十三、学生は十万人、工場は四百以上になつています。かつての消費都市は生産都市に変化しました。中国の各都市がみんなそうです。この期間の建築を一〇〇としますと、労働者住宅、クラブ、幼稚園、託児所、病院が七〇％を示しています。生産が上つた分は労働者の福祉に使われるのです。

長春のトラック工場では八時間労働で日産五十台の設計計画であつたのですが、労働者の創意は技術革新革命を生み年に二万五千件の提案がされて今年は日産二百台を目指しており完成する見通しです。日産二百五十台も自信をもつているといつていました。その証拠に各種のトラックをつくるとともに乗用車をつくつています。もちろん量産ではありませんが、これはまだ延びるという余力を示しているものです。

中国では工場の建設とともに労働者住宅が立ちならび、生産も並行して進められています。年間一万五千台生産のトラクター工場労働者の平均年齢は二十二才です。

このすばらしい発展の原動力は何かといいますと、つぎの三つであるといえます。

三つの原動力

一、中国共産党の指導と建設の路線が正しい。

総路線、大躍進、人民公社という三つの旗を高く掲げています。これは「大いに意気ごんで常に力を出して高い目標を目指し、もつとよく、もつと多く、より早く、より節約して社会主義を目指す」ということです。そのために古いものと新しいものを結合し、遅れたものと進んだものを結合し、いわゆる二本の足で進むということです。

二、大衆運動をおこすこと

すべての建設が大衆の討議によつて行われています。一人ひとりの労働者が工場の計画と発展を知つています。

三、社会主義諸国の援助と支持である。

特にソ連の援助は大きく、つぎに他の諸国の人民の援助です。日本人民の安保反対の闘いは大きな支持を与えている。

この三つに集約できると思います。

労働者に国境はない

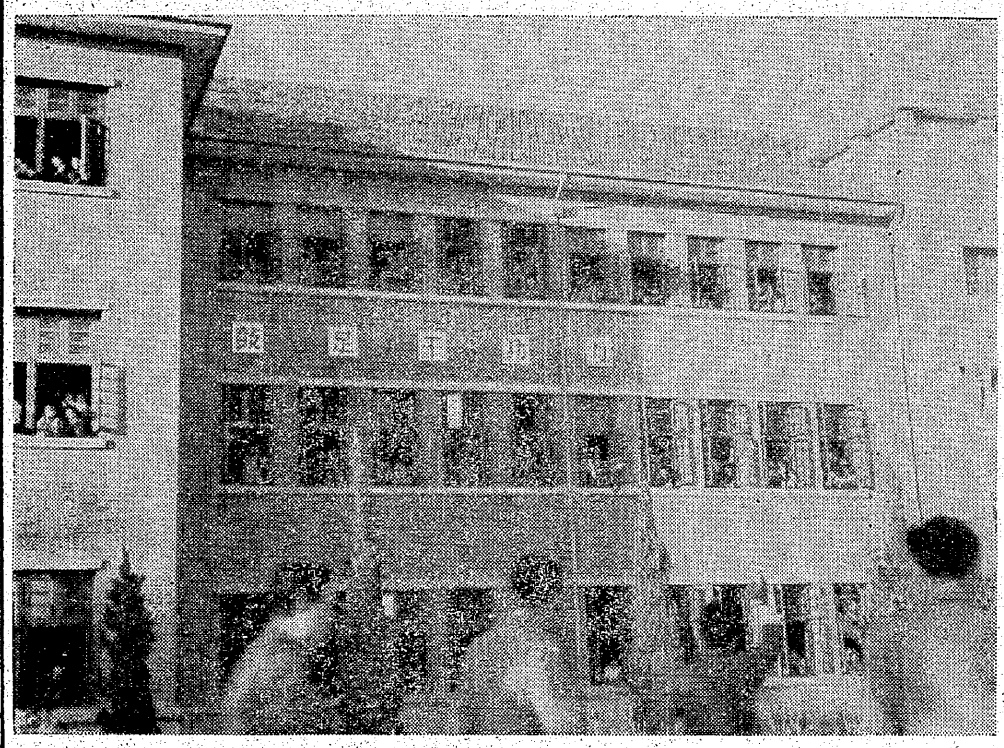
中国の媒工会（炭労）から三池労組に第二次カンパとともに招待状が来ています。代表を中国へ送り中国人民の支持と共闘にこたえるとともに、中国媒工会から代表を迎える準備をすべきではないかと思います。媒工会の卒春明主席はわざわざ私の泊つているホテルまで訪ねてきて、この日が一日でも早く実現されることを希望されました。

労働者に国境はありません。広州（昔の広東）で入国したとき「自分の家に帰つた気持ですごして下さい」と中国側から挨拶されたことは、それを現しています。

日本の安保闘争、三池の闘いが中国の労働者を励まし、さらに建設のテンポを高めています。

アメリカ帝国主義によつて、日本全土を占領され、沖縄をとられている日本人民と、台湾を占領されている中国人民は、アメリカ帝国主義と闘う戦友であると、日本側十二団体（炭労代表を含む）中国側八団体との共同声明で表明しました。そして、そのあと十二団体の名において、三池闘争支援に感謝する決議を行い、中国側に手渡しました。

戦争をおこそうとするアメリカ帝国主義と日本の反動に対して、労働者を中心にして、平和を愛する日本人民は、さらに強く闘いを進めるべきだということを訴えて報告します。



中国の仲間らの大歓迎をうける松本さんたち

今次闘争の現段階における成果に思う

(1) 産業別統一闘争への足がかり

全国各層の労働者が一つの目的のために集まつたことの意義深さは今からの労働運動の向上への大きな指標となつたし、また労働者階級の悲願である産業別闘争を容易ならしめ、社会主義社会への夢を実現させる望みを育くんだ。

(2) 政府への不信

安保と三池闘争を併行させたなかで、とくに安保は国民各層の批判を買い岸退陣まで至つたが、そのあとの池田内閣は、一応低姿勢は張つているものの、三池に加えられた諸弾圧、中立性を欠く中労委などを考えたとき、池田内閣の陰険さを知つたし、ことに警察にたいしては従来の観念を一変させるものがある。

(3) 三池の団結

半数近い人が脱落したが、この人たちにたいする憎しみがはね返つて、残つた人たちはいつそう親しさをまし、団結の強さも再認した

第二組合に思う

組合本来の精神、大衆（労働者）の幸福をより増する目的で結成されているにもかかわらず会社のテコ入れにより組合幹部の脱落で結成された第二組合を否定しながらも、現段階では既成事実として容認せざるを得なくなつた。

これからわれわれが会社と諸問題で対決するには、まず組織の一本化をはかることである。これにたいして、会社、第二組合はわれわれの組織切崩しを意図することは明らかであろう。

闘いの成果に思う
ホッパー大学卒業論文から

企業でわれわれは組織を守り、長期のたたかいを進めてきたのはたんに千二百名の首を守るだけではなく、また会社、第二組合がいつている拒否者にたいする義理などは問題外である。過去のたたかいの実績のなかから一人ひとりが信念を培つてきたことを、彼らは見忘れていたのだ。彼らは三池の歴史と自己の誇りとを会社の甘言と我利のため、あまりにも無造作に失なつてしまつた。現代は主義の変遷の転換期にあるのだ。十余年、全く苦しい時間を無駄にしたものである。

たとえ会社との妥協はあるとしてもわれわれの組織が現状を維持しているかぎり、統一の方向に進むべきであり、統一の何ごとにおいても、第二組合との妥協はあり得るはずがない。

今後の職場闘争に思う

出ている釘は打たれる。こんどの三池に集中された圧力がこの言葉を裏付けている。このことは自分の職場でもいえる。

私たちの部内、ことに仕繰部内においては一等の条件をとつていた。これは出水事故で他部内に仮移転してはじめて知つたことである。このことは委員長はじめ各役員の精力的努力と、過去の職場闘争の成果でもある。職場闘争は支部部内においても同じく保安問題に端を発している。純粋な歩増問題は少なく、またあつたとしても何らかの形で保安と結びついている。

私たちは会社との協定に保安懇先を約している。また、保安規則に記されていることは会社としても励行しなければならないはずである。これが不履行のためたまたま実力行使をすれば、生産阻害者だと不当にも切込んでくる。しかし、われわれはこの保安に関しては一歩も退くことはできない。千二百名を守り得なかつたこんどの職場闘争は至難をきわめるものと思う。仕繰関係でも、部内と部内との条件格差も大分異なる。この格差を縮めるためにも今一度到達闘争を組む必要がある。そのためには週、旬、月と日をきめて、役員だけの会議ではなく、支部全体の仕繰総会をひらき、お互いの理解を深めたなかから職制との対決をはかるを最良と思う。理論＋行動力＝職場闘争＝生活向上……。

発行不許可へ
沖縄人民党機関紙

沖ナワでは本土と併行して、十一月十三日琉球立法院総選挙が行なわれるがアメリカ民政府は、全員核武装化と永久属領化に反対し、平和と祖国復帰の先頭に立つてたたかつている沖ナワ人民党機関紙「人民」の発行を不許可とした。人民党は結成いらい、何回も許可申請を行なつているが、こんどは大田琉球政府主席がいくつかの条件をつけて許可し、民政府にうかがいをたてていた。ところがまたも不許可となつたもので、その理由の要旨はつぎの通りである。

一、このような出版物が許可されれば、出版の自由に関する概念が悪用されるおそれがある。出版の自由の基本的意義は、住民が公器を通じて行政問題にたいする意見を開陳することであるまた、新聞は客観的事実を報道すべきであるとの概念もその中にふくまれている。

二、「人民」の背景からすると、同出版物は客観的事実の報道よりも、ゆがめられた偏見のある報道が行なわれることが明らかである。さらにこれは住民に欺瞞と混乱を与えるものである。というような言論・出版の自由を封殺するための一方的な措置をおしつけて、アメリカ民政府は不当な沖ナワ支配をつよめようとしている。（「沖ナワ事情」より）

―映画紹介―
戦争の苦難をこえて
「人間の運命」（ソ連）

戦争で家族を失つた孤独の老人が追憶をこめて語る、長い苦闘にみちた半生を回顧ふうにまとめている。その半生には「生きることの苦しさに耐えられないと思つたことも、何回かあつた」が、人間には生きることが運命づけられており、生きることこそ至上のものだという。ソロコフという長距離トラックの運転手である老人は平凡な男だが、彼の過去とそれをまとめあげたこの作品は非凡であるばかりではなく、老人を孤独に追いやつた戦争に対する憎しみを監督のボンダルチュクは見事に描いている。ソロコフ（ボンダルチュク）は革命後にロシア全土を襲つた飢饉で孤独となる。同じ境遇にあつたイリーナと知りあい結婚し、二人のあいだには一男二女の子どもも生まれて幸福なときが流れたが、ドイツの侵攻による第二次大戦の始まりは、ソロコフから一切の幸福を奪つてしまう。彼は一兵卒として戦線へで、捕虜となり幾度か死戦をこえる。だが運命は彼につねに生きることを教え、戦争終結まぎわには脱走に成功するソロコフは妻子をもとめて故郷に帰るが待つていたものは廃墟、妻と娘は跡かたもない。ただ息子だけが砲兵大尉になつて第一線にいることがわかる。ソロコフはその息子に希望をつないで生きようとするが、息子もまた戦死する。希望をすべてなくした彼は、ある日息子の面影をもつた戦災孤児をみつけ、その子の親になることを思いたつて「この子のために生きてゆくさ」と生きることを運命とする人生へ踏みだしてゆく。

原作はショーロホフ。監督ボンタルチュクと撮影のウラジミール・モナホフはこの映画でレーニン賞を受賞。白黒スタンダード型